地域高齢者における性格が精神的健康の悪化に及ぼす影響

～5 年間の縦断調査結果から～

○岩佐 一^{1,2}・増井幸恵²・榎藤恭之³・河合千恵子²・稲垣宏樹²

(¹ 東京大学医学系研究科・² 東京都健康長寿医療センター・³ 大阪大学人間科学研究科)

Key words: 地域高齢者, 性格 5 因子モデル, 精神的健康悪化

Effect of personality on mental health deterioration among community-dwelling older adults.

Hajime IWASA^{1,2}, Yukie MASUI², Yasuyuki GONDO³, Chieko KAWAII², Hiroki INAGAKI²

(¹The University of Tokyo, ²Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology, ³Osaka University)

Key words: community-dwelling older adults, five-factor model of personality, mental health deterioration

高齢期における精神的健康の悪化は、QOL を損なうだけでなく、生活機能障害や死亡に影響を及ぼすため、早期の対応が重要である。精神的健康を悪化させやすい性格について明らかにすることにより、精神的健康の悪化の早期対応の一助となることが考えられる。そこで本研究では、地域高齢者における性格が精神的健康の悪化に及ぼす影響について、5 年間の縦断調査から明らかにすることを目的とした。

方法

対象者 65 歳以上の地域高齢者を対象として訪問調査（ベースライン調査、追跡調査）を行った。両調査ともに参加し、変数に欠損が無く、精神疾患（抑うつ、神経症）に罹患していない者で、かつベースライン調査において精神的健康「要注意」群ではない者（下記参照）565 人（男性 236 人、女性 329 人；平均年齢 71.7±4.7 歳）を分析の対象とした。

目的変数 General Health Questionnaire 28 項目版により精神的健康を評価した。福西（1990）に基づき、7 点以上を精神的健康「要注意」群とし、追跡期間で新たに精神的健康「要注意」群となった場合を、「精神的健康悪化」と定義した。

説明変数 性格 5 因子モデル（神経症傾向、外向性、開放性、調和性、誠実性）に基づく「ネオ性格検査（NEO-FFI、東京心理株式会社）」（60 項目）で性格を測定した。

統制変数 性格と精神的健康悪化の関連に交絡する要因を統制するため、性別、年齢、教育年数、1 年以内の入院有無、居住形態、生活機能（老研式活動能力指標）を用いた。

統計解析 精神的健康悪化を目的変数、性格 5 因子ならびに上記統制変数を説明変数とする多重ロジスティック回帰分析を行った。モデル 1 では性格ごとに解析を行い、モデル 2 では性格特性を同時投入した。

結果

追跡期間中に新たに精神的健康が悪化した者は 78 人（13.8%）であった。

性格と精神的健康の関連について多重ロジスティック回帰分析により検討したところ、神経症傾向、外向性、調和性、誠実性が精神的健康悪化に寄与し、神経症傾向が高い者ほど、外向性、調和性、誠実性が低い者ほど、精神的健康が悪化しやすいことが明らかになった（表 1）。

表 1 性格 5 因子モデルと精神的健康悪化の関連

	モデル 1	モデル 2
神経症傾向	1.74**	1.54**
外向性	0.51**	0.53**
開放性	0.94	1.01
調和性	0.74*	1.05
誠実性	0.74*	1.15

表中数値は 1SD あたりのオッズ比。説明変数の数値が 1SD 増加することによって精神的健康が悪化する相対危険度を示す。性別、年齢、教育年数、1 年間の入院有無、居住形態、生活機能の影響を統制した。モデル 1 では性格特性ごとに解析を行い、モデル 2 では性格特性を同時投入した。** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .1$

考察

神経症傾向の高い者は、ディストレス（心理的苦痛）に対して脆弱であるゆえに精神の不調を招きやすく精神的健康が悪化しやすいこと、外向性の高い者は、自尊感情や楽観主義的傾向が高くディストレスに影響されにくいために精神的健康が維持されやすいこと、調和性の高い高齢者は、他者との協調を好むゆえにディストレスに影響されにくく精神的健康が維持されやすいこと、誠実性の高い者は、自己統制感が強く、健康管理意識が高いゆえに不適切な保健習慣（喫煙、過度の飲酒、運動不足等）を持ちにくく精神的健康を維持しやすいことがそれぞれ考えられた。

本研究は、東京都老人総合研究所長期プロジェクト「中年からの老化予防総合的長期追跡研究心理学班」の一環として実施した。